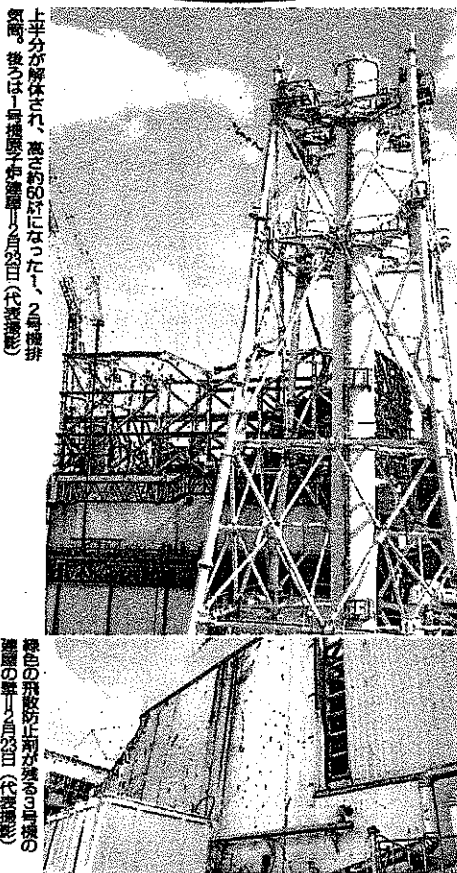
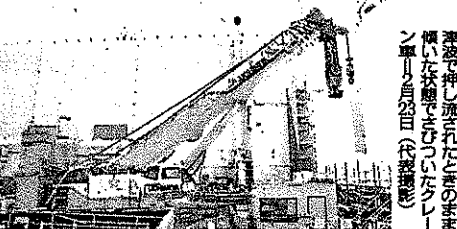


# 原発 遠い廃炉



上半分が解体され、高さ約60メートルに上り、2号機井筒。後ろは1号機廃炉作業中。2月23日(代表撮影)

緑色の飛散防止用遮る3号機の建屋の壁(2月23日) (代表撮影)



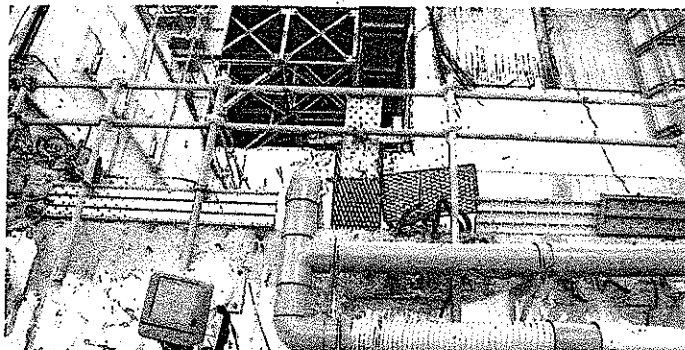
重き押し運された3号機の壁。傾いた状態でまひつり(2月23日) (代表撮影)

10年前の2011年3月11日、東電電力福島第1原発は地震・津波に襲われました。3基の原子炉が同時に炉心溶融(メルトダウン)する重大事故を起こし、環境中に大量の放射性物質をまき散らしました。それから10年。いまだ事故は収束せず、2030年後に完了するはずの廃炉の道筋もみえません。巨大輸送の難業を報告する前、目を凝らす「安全神話」にひびき渡った無謀な強行推進政策が引き起こした、史上悪夢レベルの原子力事故の後始末の現状は、

(中村潔佳)

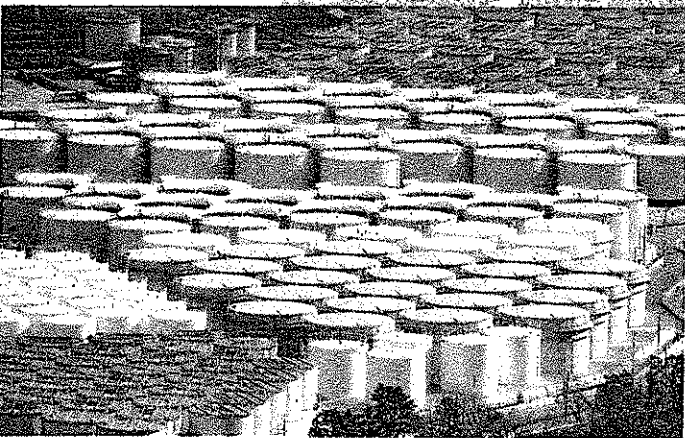
事故現場の状況を見ながら本紙チャーター機で取材し、地上では原発敷地内を歩いて生々しい事故の爪痕を間近に見ました。

福島県いわき市沖を北上するまで車をかたがたした空の気流は原発に接近するにつれ乱れました。激しく揺れる飛行機から、4



壁が崩壊し鉄筋がむき出しになった3号機原子炉建屋。線量計は毎時227マイクロシーベルトを示しています=2月23日(代表撮影)

## 「安全神話」の後始末続く



敷地内に林立する汚染水タンク=2月5日(本紙チャーター機から佐藤研二撮影)

まも原子炉建屋の上部、格納容器の構造がシニールと曲がった鉄骨がもたらしたなりがれをも残っています。最近の調査で、原子炉格納容器の上下敷いたコンクリート板(シールドドラム)に干渉を起す大量の放射性物質が蓄積していることが判明。強行作業で腐蝕をさらしています。

### 地震で損傷拡大

その隣の2号機は、水素爆発が起り、かろうじて事故前の面影を残しています。しかし地震は汚染され、事故前は取りおりの作業だった使用済み核燃料プールからの燃料取り出しを着手できていません。先日は日深まで入り、

北側から見た建屋はまるで廃墟です。壁には津波の漂流物にまみられた多数の傷。事故初期にまかれた放射線物質の飛散防止剤の緑色が異様に目立っています。地上にはまだ噂の、

た福島県沖の地震後、格納容器内の水位が低下。地震で損傷が拡大した可能性が濃厚です。

### 汚染水1日4トン

しかし汚染水増加の原因である、原子炉建屋への地下水や雨水流入を止めることに成功していません。いままで1日400トンのペースで汚染水は増えているため、高濃度のトリチウム(3重水素)を含む「処理水」がタンクに増え続けています。

### 37リットル抱え老朽

1号3号機は原子炉から運び落ちた核燃料プールの計6000〜11000トン(推定)を2025年ごろの状態で分布しているのが、全容は未解明です。取り出しの手法を定めておらず、東電の担当者は「本丸の37リットルはこれから、取り出しの最初の1歩を踏み出せています」と、政府・東電が5年以内に完了するとしている「廃炉」が、どんな状態を指すのかさえありません。毎日で損壊した雨水のしるしは、プールの抱えたる汚染水を、37リットルを抱えたままらずに捨てています。

福島第1原発の10年の現実、ひとたび原子力事故が起れば多くの犠牲を出し、環境や人間社会を破壊し、収束がいかに困難を示しています。被害を受け止めるのか、再び豊かな原発推進を歩むのか、問われています。